

日本語数量詞体系の一考察

宇都宮 裕 章

要 旨

日本語の数量詞を語彙的意味から分類すると、定数、全数、個別数、部分数、量数、概数、疑問数の七つが挙げられる。これらは、名詞であらわされるものを規定する、連体・連用両方の修飾成分になり得るといった共通の性質をもつ。

数量詞は、それがさししめしている数を確定的に切り取れるか否かに関する「数量性」という意味素性と、ある特定の集合と結び付くかどうかに関する「定性」という意味素性を備えている。二つの素性はそれぞれ+ (プラス) か- (マイナス) かの極をもち、どちらか一方をもつか、両方をもつかによって素性ごとに三つのタイプの数量詞が存在する。そして、二素性の組み合わせによって七種類の数量詞がまとめられ、一つの体系を形成している。

この意味素性は、数量詞の文法的なふるまいにも影響を与えている。

【キーワード】 数量詞, 意味素性, 数量性, 定性, 数量詞後置

1. はじめに

「数量詞」という品詞が言語学的に論じられるようになって久しいが、教育界においては十分認知されているとは言い難い。そのふるまいかたから名詞ともまたは形容詞とも区別ができず、加えて副詞的にも用いられるものを、一つにまとめて扱うことに困難が生じていたためであろう。しかしながら、「数量を規定する表現」一般を幅広く収集し類似点を中心に調べてみると、実にまとまりのある性質をもった単語群であることが分かる。そしてこのことは、「数量詞」という一品詞を他の品詞と同列に処す可能性を示唆しているのではないだろうか。

本稿ではこうした体系的把握をふまえ、種類の異なる数量詞のはたらきやふるまいが各数量詞の〈意味素性〉によるものであることを中心に論じる。加えて長い間議論の中心になっている数量詞の後置にも触れ、その解決の一助にしたい。



2. 日本語数量詞の種類と類似性

日本語の数量詞を概観してみると、「3個」「5匹」「数十人」のように〈数量をあらわす部分〉+〈属性をあらわす部分〉という形態をなすものという見方がごく一般的であろう。本稿でもこうした形を数量詞と呼ぶことに変わりはないが、上記の例に加えて意味的に名詞であらわされるものの数量を規定できる単語を広く数量詞と呼ぶことにする⁽¹⁾。

典型的な数量詞を語彙的意味内容により分類すると、次の七種類に分けることができるだろう。

①定数……具体的な数字で確定的な数量をあらわすもの。

「3人」「5つ」「両方」「100m」など。

②全数……全称数量詞。集合の元を余すことなくさししめすもの。

「すべて」「ぜんぶ」「みんな」「全体」など。

③個別数……集合中の個々の元をさししめすもの。

「一人一人」「一つ一つ」「それぞれ」「おのおの」「めいめい」など。

④部分数……一集合の割合，部分をあらわすもの。

「半分」「3割」「80%」「一部」など。

⑤量数……数量の多・少をあらわすもの。

「たくさん」「いっぱい」「多く」「かなり」「相当」「大勢」

「少し」「多少」「若干」「少々」など。

⑥概数……おおよその数量をあらわすもの。

「数人」「何人か(も)」「いくつか(も)」「大体」など。

⑦疑問数……認知していない数量をあらわすもの。

「何人」「いくつ」「どのくらい」など。

もちろん、語彙的な意味の特質により上記のいずれかのカテゴリーとも判別しがたい中間的な、もしくは過渡的な語が存在する。例えば、「ほとんど」といった数量詞は数量の多・少をあらわせるので量数に属するであろうが、意味内容は全数に近い。「2, 3人」の場合は概数とも定数とも判じがたい。また、「大半」は部分数と量数の両カテゴリーにまたがっている。こうした語の存在は明確な分類を妨げるかもしれないが、カテゴリー間の相互関係は明らかになる。重要なのは七つのカテゴリーは互いに関連し合い一つの「数量詞」という一範疇を構成していることなのである。

さらに興味深いのは、数量詞に付加される接辞の存在である。「おおよそ」「約」「ほど」などは「3人ほど」「おおよそ500個」のように定数に付いて概

数的な機能を加える。また、「とも」は「3人とも」のように使用されて全数的な数量詞になる。さらに、「ずつ」は「3人ずつ」「少しずつ」のように個別数的意味を付加するはたらきをもつ。これらの接辞を利用することにより、カテゴリー間で数量詞の自由な転用ができるようになっている。このことからカテゴリー間の流動性をうかがい知ることができるだろう。

数量詞を一つの品詞とする理由は、以上のような七つのカテゴリー間の流動性だけでなく、その文法的なふるまいの類似性にもある。

類似性の第一は、名詞であらわされるものの数量を規定する性質が挙げられる。これは他の品詞にはない数量詞だけがもつ基本的な性質である。

第二に、「の」が付いて連体的に使用されることが挙げられる。ただし、この形でどういう名詞を規定するかは数量詞の語彙的な意味によって制限される。「3冊の本」「たくさんの本」とはいえども「3人の本」「大勢の本」とはいえない⁽²⁾。

第三に、数量詞が規定する名詞に後置され副詞的に用いられる点がある。ただし、副詞的に用いられない後置は、各数量詞ごとに生起可能かどうか違いがあり数量詞一般の類似点として取り上げることはできない。しかしながら、どのような数量詞が生起可能であるかの条件は存在する⁽³⁾。

3. 意味素性による区別

個々の単語は個別の文法性質や語彙的な意味を越え、共通した文法性質や意味特徴をもってある単語群を形成する。数量詞も例外ではなく、前述の類似点でまとまっているといえるが、その一方でそれぞれが全く違ったふるまいやはたらきをもち、いくつかの下位グループを成すことも事実である。このように共通点で集合しながら相違点を生み出すために集合の成員がもつ意味的な特徴を意味素性という。したがって、意味素性とは個別の単語に備わる基本的な意味の上位にある意味で、カテゴリーカルなものにとらえるのが妥当である。本節ではまずこの意味素性がどのように数量詞体系を形作っているのかをみていくことにする。

数量詞の中には、数量を具体的・確定的に切り取ることができるものと、それができないものがある。「3人」や「80%」などの数量詞は「3」や「80」のように具体的な数字で数量を確定できるため前者に属し、確定できない「たくさん」「数人」等の数量詞は後者に属するといえる。このように数量を確定的に切り取れるか否かに関する意味素性を〈数量性〉と

呼ぶとすると、数量を確定できるものは+ (プラス)、確定できないものが- (マイナス) の素性をもつということが出来る。そして、数量詞は〈数量性〉が+か-か、もしくは両方の素性をもち得るかによって大きく三種類に分類することが可能になる⁽⁴⁾。

数量性が+であるものの典型例としては定数と全数が挙げられよう。全数については、ある名詞を規定した結果その名詞句全体の数量が分かる場合とそうでない場合があるが、その名詞句の意味がどんなものであれ、名詞の集合の元を一つも余すことなく拾い出しているという全数の性質は変わらない。つまり、どんな場合にも数量を「全」と確定する性質をもつがゆえに数量性は+となる。次の文は、具体的に数が分かる名詞とそうでない名詞を規定している全数の例であるが、はたらきは定数と同じであることが観察される。

(1) (野球では) 走攻守すべてでミスが出たら勝てないよ。

(神奈川 94.10.26)

cf. 走攻守3つでミスが出たら……

(2) しかし、情報管理をすべてやってくれる秘書のコストは、かなり高いはずである。(整理・159)

cf. 情報管理を3種類やってくれる……

数量性が-であるものには量数・概数があてはまる。これらは漠然となら数量を切り取ることが可能であるが、確定的に切り取ることができない。「たくさん問題を解いた」といっても問題数が「〇〇の数だ」と確定するわけではない。また、全数の切り取りによって数量が「全」と確定するのもはたらきを異にしている。問題数が文脈上実際に「50題」であっても「1題」であっても、「すべての問題」と設定可能であるが⁽⁵⁾、「1題」のとき「たくさん問題」と解釈することできない。さらに「50題」を「たくさん」といえるかどうかは「たくさん」がもつ性質では決められないだろう⁽⁶⁾。

両方の素性をもち得る数量詞というのは、文脈や環境によって素性が変化するもので、個別数、疑問数がこれに含まれる。

個別数については、全数的な性格を有するときには素性が+となり、量的な性格を有するときには素性が-となる。下の例ではaが前者で、bが後者といえる。

(3) a 漢字は一つ一つ意味をもっている。(日語・79)

cf. 漢字はすべて意味をもっている。

b (次々発生する) 問題を一つ一つ片付けた。

cf. 問題を少しずつ片付けた

少し問題があると思われるのが疑問数であるが、これも数量性という観点からは両素性を取り得ると考えるのがよいと思われる。確かに疑問数自体の数量は不明確ではあるが、その不明確性は「分からない項目を問う」という疑問数の語彙的な意味に起因する。これは定数が「3」とか「5」などの具体的な数字の意味を、量数が「多」や「少」などの大きさの意味をもつのとなんら変わらない。疑問数の場合、語彙的な意味と素性とを区別するのが難しいが、次のように考えることにより区別が明らかになるであろう。疑問数は答えを必ず誘発する目的で使用されることから、疑問数とその答えは意味論上一組ととらえることが可能である。そうすると、その答えが数量的に確定しているか否かが素性の極を決定付ける決め手となる。

(4) 何人の学生がここに来たのでしょうか？

----- 3人です／分かりません。

(4)では、答えが前者の場合だと「何人」の数量性は+とみなされ、後者だと-ということが出来るであろう。

語彙的な意味そのものの流動性によって、意味素性を明確にしにくいものもある。例えば、部分数のうち「半分」「半数」などについては「 $1/2$ 」と同値になる場合と、「およそ $1/2$ 」という意味で、生起するときがある。下の例で(5a)は前者、(5b)は後者といえる。

(5) a (ワークステーションの) 騒音も29デシベルと半分に低減。

(神奈川 94.10.6)

b この時代には、全人類の半数が都市に住むようになる。

(神奈川 94.10.6)

そもそも部分数全般については、「一部」のように意味的に量数に近いものから、「80%」などのように素性が+にしかかなりえないものが存在するため、範疇としてどの意味素性を当てはめるのが適切であるか疑問点が残る。今後の議論を要するところであろう。

一方、数量詞はそれが特定された名詞の集合と結び付くか否かによっても区別することができる。数量詞が特定された名詞の集合を規定するとき、その名詞であらわされる集合は、不特定多数のものであってはならないの

である。仮に「すべての絵」といった場合、「絵」の集合は不特定多数のもの、あるいは一般化されたものではなく、例えば博物館が保管しているものであるとか、ピカソの絵であるとかの特定物であると解釈される。しかしながら、「たくさんの絵」といえば、「絵」の集合は（絵という性質を備えさえしていれば）どんなものでもさししめすことができるだろう。

以上のように、数量詞が文脈上特定された名詞の集合と結び付くかどうかに関する素性を〈定性〉と呼ぶ。そして、特定された名詞の集合と結び付く素性を＋、不特定多数の集合と結び付く素性を－とすると、数量性と同様に＋か－か、もしくは両極かによって数量詞を三種類に区別することができる。

定性＋の素性をもつ数量詞には、全数や部分数がある。これらの数量詞は特定された名詞の集合と結び付く。したがって、「太郎は絵をかくのがすきだ」のように名詞（絵）に高い一般性を与える文脈では使用されにくい。

(6) ?太郎はすべての絵をかくのがすきだ。

もし、この例文が実際に用いられるとするならば、「太郎は(ピカソのかいた)すべての絵をかく(模写する)のがすきだ」のような文脈に限られる⁽⁷⁾。

定性＋の素性をもつ特定集合との結び付きという意味的な性質は、数量詞が生起する文の中に規定する名詞が存在しなくても文の外に規定すべき名詞を求める傾向となって顕著にあらわれる。いわば、数量詞の代名詞化である。

(7) a ひとつの問題提起は、前の問題のひとつを忘れろということである。忘れるべきではないだろうが、全部を真剣に頭においておけば、狂ってしまう。(暦・37) → 前の問題

b 「沢山の鳥の啼き声を録音なさるんですか？」宏子は訊いてみた。「今までにやったのは二百種程です。日本で見られる鳥の種類は五百種ですが、この中には啼かない鳥もありますから、ざっと半分ですかね。」(海峡・40) → (録音した) 二百種程

これに対して、定性－の素性をもつ数量詞である量数と疑問数は前述のような性質をもたない。これらの数量詞は特定化された名詞の集合とは結び付きをもたないのである。よって、規定する名詞の集合は必ず不特定である。(8)にあるように、たとえ、一つの元が特定されていても、全体の集合は唯一のものだとして確定的にさししめすことができない。

- (8) たくさんのピカソの絵／大勢の鈴木さん／少数の富士登山者
いくつ 何人 何名

両極の素性をもつものには、定数の他、概数や個別数も含まれる。(9)はこれらが特定の集合と結び付いた場合で、(10)は不特定の集合と結び付いた場合である。

- (9) a 四月十七日、東京・品川のソニー本社で、初めての「株主総会」が開かれた。八人のプレジデントが交代で議長を勤め、～
(94.5.23日経朝)
- b ついでだから、メモにまざっている新聞の切り抜きを、三つほど要約紹介する。(博物・111)
- c 「ひろさん、まだ帰らないの？」帰り支度した同僚が一人一人声をかけて来たが、宏子は、「ええ、もう少し」と、あいまいに返事をしていた。(海峡・31)
- (10) a 初回の昨年は五日間で延べ二千三百人の観客を集めた。
(94.5.23 日経朝)
- b なるほど遙か遠くを数羽の鳥が舞っている。(海峡・42)
- c 漢字は一つ一つ意味をもっている。(日語・79)

そして、+の素性をもつと次のように代名詞化もされる。

- (11) a 庄司はよほど二人に録音を聞かせたいようであった。(海峡・50)
→松村と宏子
- b テレポートで宇宙人が地球へ出現。何百人もである。(博物・195)
→宇宙人
- c そして、今の自分にとってこれ以上気がかりなことがなくなるまで、一つ一つ点検していきます。(日曜・79)
→自分の問題

以上の考察から、数量詞の七つのカテゴリーを数量性・定性二つの意味素性によって分類したのが次の表である。

+, -どちらの素性も取り得るものを「n」で表記した。表をみるとそれぞれの素性が数量詞の種類を決定付けていることがよく分かるであろう。素性の単純な組み合わせを考えると九種の数量詞があることが予測されるが、考察の結果は上のようになった。ただし、表のアの部分は部分数のうちの「半分」などで、イの部分は定数で補うことが可能である。定数は-の定性も取り得るためである(8)。

(12)

数量性 定性	+	n	-
+	全数	部分数	ア
n	定数	個別数	概数
-	イ	疑問数	量数

4. 素性が文法に及ぼす影響

数量詞がもつそれぞれの素性は数量詞がしめす文法特性に深い関係がある。

文中で数量詞は必ず+か-かの素性をもって存在すると考えられるため、基本的には数量詞の素性が文法特性と衝突（矛盾）を起こさないことが生起の条件である。これを前提にいくつかの例を考察してみよう。

まず、数量詞が名詞に直接（格助詞をはさまないで）後置される用法であるが、次の例のように量数以外は生起可能である。

(13) a 男3人／お金全部／生徒一人一人／車何台 が／を／で／に
税率3％／本数冊

b *お金たくさん／*生徒大勢／*燃料少し が／を／で／に

これらの観察例から、数量性・定性のどちらも+を取り得ないものは、直接後置できないことが分かる。名詞にはよく「課長島耕作」「正義の味方月光仮面」などのように二つ並べて同格的に表現する用法があるが、数量詞の直接後置はこれに近いのではないかと思われる。これに基づくと、名詞に後置されるものの条件は、①名詞的であること、②後置される名詞に固有名詞が多いのと同じように、後置される数量詞は特定されているものであること、が考えられよう。すると、定性+を取り得る数量詞は①代名詞として機能する②特定の集合と結び付く、という前節の議論から二つの条件を満たすのではないだろうか。ただし、後置する数量詞が疑問数の場合、数量性に関してしか+を取り得ないので、上の二条件を十分満たしているとは言い切れない。しかし、もし数量に関して特定できるものも後置を許すとすればどうであろうか。実際には疑問数の直接後置の適切性にはゆれが生じているので、いかなる場合にも後置できるわけではないだろう。参考までに数量と集合をそれぞれ特定していると思われる例を挙げておく。数量・集合共に特定されている同格の例は(1)が当てはまるであろう。

(14) a 最後のにのこった本丸の守将松田康長は、部下二百人とともに猛烈

な白兵戦を展開して、ついに全滅をした。(真田・243)

- b 微妙なタイミングが芝居の在り方全体にかかわってくるんです。
(94.9.3 神奈川)

次に格助詞をはさんで後置される用法であるが、これは前述のように副詞的な用法で数量詞一般がもつ性質である。しかしながら、ここにも素性に関して制限がある。

- (15) a 学生が2人やってきた。
b * 9人の/たくさんの/すべての 学生が2人やってきた。
c * 9人の/たくさんの/すべての 学生が大勢やってきた。
d 9人の学生が すべて/一人一人/2組 やってきた。

aのように自然な文も、数量詞で名詞を規定すると不的確になる(b)。これは後置される数量詞が定数(数量性+)でも量数(数量性-)でも同じことである(b・c)。このことから、基本的に格助詞をはさんで後置される用法では、先行する名詞は数量詞によって規定されてはならないことが分かる。ただし、先行名詞の集合の全体をさししめすことができれば生起可能である(d)。

この用法における文法的な意味は「数量の規定がない集合からある数量分を選び出して提示する」ことにあるだろう。この「選び出し」は先行する名詞の集合を入力として別の集合を作り出すという関数的なはたらきに相当する。このはたらきを「量化」(宇都宮1995)と呼んだが、そこでは数量があらかじめ規定されている集合を取り上げられなかった。(15)dの例から、数量性+の数量詞で規定された名詞の集合からの選び出しは、その集合の元を過不足なく選び出さなくてはならない規則が考えられる。一方次の例にあるように、名詞を規定する数量詞が-の数量性をもつと、全体量がどのくらいになるのか不明確となるためどの程度まで選び出したらその全体量に等しくなるのかが分からなくなり、その結果適格な文とはいえなくなるのが予測される。

- (16) ?たくさんの学生が すべて/2組 やってきた。

しかし、集合中の個々の元をさししめすことのできる個別数の場合は、一つ一つ選び出していった結果全体の集合になる可能性があり、その点で下の例のように適格な文に近くなるのではないだろうか。

- (17) たくさんの学生が 一人一人 やってきた。

5. おわりに

本稿では、数量詞の体系的把握を目指して、その体系がカテゴリカルな意味特性である「意味素性」によって成立していることをしめした。ここで論じた意味素性は「数量性」「定性」の二つで、これらの組み合わせによ

り数量詞の七つの種類を分類した。さらに、素性は体系付けに関与しているだけでなくいくつかの文法現象にも影響を及ぼしている。本稿では紙面の関係上その一端を取り上げるにとどめた。

注

- (1) 「度」や「回」はeventを規定するといわれるが、そのeventを名詞化したもの（地震・上京など）の数量を規定することも可能である。そうした点を考え、「名詞であらわされるもの」と表現した。
- (2) 「3人の所有する本」の意味であれば自然であるが、これは名詞の数量を規定しない数量詞の限定用法という機能である（宇都宮1995参照）。
- (3) 本稿第4節で後述する。
- (4) 数量性が一であるということは数量性をもたないことではない。数量性が意味素性として備わっているからこそ数量詞が数量詞として成り立っているのである。
- (5) 「すべて」といったら集合中の元（要素）の数量がいくつであろうとも余すことなくさししめす。こういう点で「数量の切り取りが確定的である」と述べた。したがって、集合中の元が{a, b, c, d……}の五十個ある場合、「集合中の元を余すことなくさししめす」ことは50個の元をさししめすことに相当し、集合中の元が{a}という一個しかない場合では“a”そのものをさししめすことに相当する。こうした性質があるために、たとえ実際に問題数が一題しかなくても「すべての問題を解いた」ということができる。一題しかないときにわざわざ「すべて」と表現するかしないかは語用論的に考えなければならない点であり、ここでの議論とは厳密に区別する必要がある。
- (6) 「たくさん」の数量が具体的な文脈に入ると確定する場合があるが、これは、語用論的問題を含んでいるため、本稿では取り扱わなかった。
- (7) なお「すべて」が限定的に用いられるときには連体詞化しているといえよう。この場合「あらゆる」と同じ意味になり、「あらゆる（種類の）絵」の意だと上の例文は不自然とはいえないかもしれない。
- (8) または、概数は+の定性、疑問数は+の数量性を取り得るところから、アの部分を前者で、イの部分を後方で補うことも可能であろう。

参考文献

- (1) Haig, J. 1980. “Some Observations on Quantifier Floating in Japanese,” *Linguistics* 18, 1065-1083.
- (2) 堀口和吉 1982. 「数詞・基数詞」『日本語教育事典』大修館, 109-110.
- (3) 益岡隆志 1984. 「文法関係と数量詞の遊離」『国語学論説資料』19, L102-112.

- (4) Miyagawa, S. 1989. "Structure and Case Marking in Japanese," *Syntax and Semantics* 22, Academic Press.
- (5) 奥田靖雄 1983. 「に格の名詞と動詞のくみあわせ」『日本語文法・連語論 (資料編)』, 言語学研究会編, 281-323.
- (6) 奥津敬一郎 1983. 「数量詞移動再論」『人文学報』160, 東京都立大学, 1-24.
- (7) 大木充 1987. 「日本語の遊離数量詞の談話機能について」『視聴覚外国語研究』10, 大阪外国語大学, 37-67.
- (8) 寺村秀雄 1991. 『日本語のシンタクスと意味III』, くろしお出版.
- (9) Utsunomiya, H. 1994. "A Study of Quantificational Force in English," MA thesis, Yokohama National University.
- (10) 宇都宮裕章 1995. 「数量詞の機能と遊離条件」『共立国際文化』7, 共立女子大学国際文化学部紀要
- (11) 矢澤真人 1985. 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子短期大学紀要』23, 96-112.

(〔 〕内は使用した略語)

〔神奈川〕 神奈川新聞

〔日経〕 日本経済新聞社

〔真田〕 佐竹申伍『真田幸村』PHP研究所

〔博物〕 星新一『できそこない博物館』新潮社

〔暦〕 星新一『きまぐれ暦』新潮社

〔海峡〕 井上靖『海峡』角川書店

〔日曜〕 菅野泰蔵編『こころの日曜日』法研

〔日語〕 金田一春彦『日本語 (上)』岩波書店

〔整理〕 野口悠紀雄『「超」整理法 情報検索と発想の新システム』
中央公論社

(共立女子大学国際文化学部)